

《追悼》

磯野富士子先生を偲んで

芝山 豊

磯野富士子先生のパリからの手紙が手元に数通残っています。最初のもは1975年6月10日の消印で、私たちが送った『モンゴル研究』創刊号2冊のうち1冊をラティモア氏に見せた上でリーズ大学のオノン先生に送ったことや、「大学生のレベルでこれだけのものが出来るのは他の国にはないといってもよいでしょう」というモンゴル研究会へのお褒めのことばなどが記されています。

書き出しに、「去年はじめて皆様とお目にかかってそろそろ1年になります」とあるのは、1974年、磯野先生は大阪外国語大学で集中講義を担当された時のことです。

1974年は、磯野の先生が中公新書の『モンゴル革命』を出版された年です。当時外大の前期課程の学生だった私は、担当の小貫雅男先生に無理を言って、後期課程の講義を聴講させていただきました。

昼休みに食事に出て、学生たちが食べる速さに目を丸くしておられたことをよく覚えています。考えてみると、その頃の富士子先生は、現在の私と同じ年齢だったはずですが、いまの私とは大違いで、上品で華やいだ雰囲気と若々しさをお持ちでした。先生の精神のしなやかさは、その頃のことだけではなく、傘寿を過ぎてても変わらず、どなたもおっしゃるように、まるで女学生のようなでした。

富士子先生の若さの秘密が知的好奇心にあったということは、衆目の一致するところでしょう。

その好奇心を象徴するものがあります。それは、富士子先生が最後まで手元に置き、飾っておられ

た一枚の絵です。



大きな扉を前にした一人のラマ僧。僧は、いましもその扉を押し開けようとしています。アジアの歴史に関心を抱く方なら、この彩色された絵には、元になったスケッチがあることにお気きづきになるかも知れません。探検家スヴェン・ヘディンの『チベット遠征』の挿絵、「第五代タシ・ラマ（パンチェン・ラマ）廟の入り口」です。

実は、ヘディンのスケッチには扉を開ける僧の周囲に他に9人の僧が描かれているのですが、彩色画は扉の前の一人だけを描いています。歴史と叡智が詰まった聖なる場所への扉を開く一人の僧。扉の向こうには、どんなものが待っているのでしょうか。清澄な空気と静寂の中に、知的なスリ

ルを感じさせる劇的な場面です。いかにも、知的好奇心を失うことのない先生が愛された絵だと思ふのです。特定の宗教からは常に距離をおいておられた先生ですが、その強い意志の背景には、なにかしら、人間にとっての超越的な存在に対する畏敬の念もあったことをうかがわせます。

その絵は、磯野先生のヨーロッパでの何か大切な思い出と繋がるものであったようです。おそらくストックホルムでのことだと思ふのですが、1952年に没したヘディン自身ではなく、ヘディンを直接知る人物で、ヘディンのスケッチをもとに彩色画を描いた高名な画家と偶然出会い、その方から記念に贈られたものというお話だったように記憶しています。

この絵はいま宮脇淳子さんの研究室に飾られています。

何故、そうなったかは、次のような次第です。

2007年の10月、私はモンゴル研究会の今岡良子さんから一通の転送メールを貰いました。ある研究者の方からのメールで、「磯野富士子先生に会ったが、うまく会話が成立しなくなっているの、何か聞くべきことがあれば、お早めに」というような内容だったと思います。驚いて、何度か電話をしましたが、繋がりませんでした。やや時をおいて、ようやく、電話で話せた時、先生はこれからホスピスに移るつもりで用意をしているということを告げられました。心配させまいと、それまで私には、体の不調を隠しておられたようでした。「目白のお家を引きあげられた時のように、お手伝いに行きましょう」と申しあげると、「来なくていい」とおっしゃいます。「手伝いがいらなくても、会いたいから行きますよ」と言うと、「私が会いたくないのよ」とのこと。「何故ですか?」と尋ねると、「だってさ、vanity だと思ふけどもさ、見られたくないのよ。」という答え。短い押し問答の中で、綺麗な発音で vanity の語が何度か繰り返され、私はついに面会を諦めました。その時

の電話を先生はなかなか切ろうとなさいませんでした。電話を切るきっかけを作ったのは、お体への悪影響を気にした私の方でした。それが最後の会話になるとは思っていなかったからです。

年が明けて、2008年2月初め、先生が1月5日にご帰天になった旨、ご遺族からお電話をいただきました。その折、件の絵についてお話がありました。

富士子先生は、磯野誠一先生がお倒れになり、ご夫婦揃って、ケア付きマンションにお移りなるため、ご自宅を処分され頃から、蔵書の整理を始めておられました。法律関係のものは東京大学に、モンゴル関係のものは岡田英弘・宮脇淳子ご夫妻の研究室や大阪外国語大学へといった具合に、用途を考えて寄贈されました。最後となった電話の頃、先生の手元には、ほとんど何も残しておられなかったと思います。ホスピスには大きなものは持っていけない。気に入って、手元に残して飾っている絵があるのだが、これをどうしようかとのことだったので、「引き取り手が他になければ、私が貰いますよ」と申し上げました。富士子先生はその時のことを覚えておられて、この絵はオリジナルではないが、捨てずに必ず芝山に渡すように言い残されたそうです。

富士子先生の御遺志で開かれた3月の富士子先生の「偲ぶ会」の後、宮脇さんと一緒にその絵を拝見しました。宮脇さんは一目見て、気に入られて、欲しいとおっしゃったので、必ず飾っていただけるなら、とお譲りしました。先生のご厚意を無にしたように思われるかもしれませんが、富士子先生は私にその絵が捨てられないようにしてほしいと願われたのだと思ひましたし、宮脇さんのところは、相応しい場所に思えました。私にとって、先生の愛した絵を毎日見て暮らすのは少し辛いことでしたし、手元には、富士子先生への思い出の品は既に十分に残っていました。

「(富士子先生のところから)君のところに来た

のは(資料的な価値のない)ガラクタだけでしょ」とある研究者の方から言われたことがあります。なるほど、その通りかも知れません。でも、ガラクタこそが私の宝物なのです。書籍は誰にとっても価値がありますが、ガラクタは同じ思いを共有する者だけに価値をもつものです。

手元のガラクタは、『オールドス口碑集』の全翻訳原稿とモスタールト神父から贈られたオールドス・モンゴル語の辞書とテキスト。これはどのように使ってもよいというお言葉と一緒にお預かりしました。他にも、『冬のモンゴル』滞在中、肌身離さず持っておられたアヤガ(お椀)のような、ご本人と私以外には全く興味を示さないであろう品もあります。

磯野先生から頂いたものは、そうした目に見えるものだけではありません。先生からグロータス神父へのご紹介がなければ、『南北モンゴルカトリック教会の研究』という本はこの世に存在しなかったでしょうし、なにより、1975年のお手紙の末尾にあったモンゴル思想史研究に対する励ましがなければ、研究者としての現在の自分はなかったと思います。モンゴル研究、とりわけ、文学や思想の研究などを続けても、研究職につくことはおろか、生活していくことさえ困難と思われた時期、富士子先生がおられると思うだけで、「本当の学問」とは何なのかを見失うことなく、頑張るための勇気が湧いて来る気がしました。

富士子先生が60年前に出版された『冬のモンゴル』には、「本当の学問」について書かれた箇所があります。「人間の小さな力をもって自然と人間性の神秘を探るには、全部の研究者が力を合わせても遠く及ばないというのに、その一人一人がお互いの小さな力を「学者の偏屈」や独占欲で切り崩し合っていたら、一体何ができるのだろう。」その節は「私は真の学問の持つ可能性を信じたい

と思う。」と結ばれています。

最近の大学教員などは、青臭いと滅多に口にする事のない「本当の学問」ですが、富士子先生が生涯それに忠実であったことは間違いがありません。それは、先生が日本の「制度としての学問」の埒外にあったという表面的なことだけではなく、研究者として、フィールドに向き合う姿勢、そのものでした。

誠一先生とともに西北研究所で研究生生活をスタートされた富士子先生ですが、戦後日本の様々な場所で活躍された西北研究所のメンバーとは一線を画するところがありました。「梅棹のタフさと磯野のナイーブさの間に、異文化との出会いの光と闇が交錯している」(海野弘『陰謀と幻想の大アジア』平凡社、2005年)と言われる所以です。先生ご自身は、『冬のモンゴル』を「本物の活仏や王公が機能していた社会」の記録として現在も価値のあるものと考えておられました。その通りですが、モンゴルで参与観察する日本人の立場を考えるために、その書物と富士子先生のその後の生き方がとても重要なものであることを、若い世代の方々に是非知っておいいただきたいと願っています。

しかし、教師の仕事は教師なしで生徒がやっていけるようにすることなので、先生を称えるためには、いつまでも感傷に浸らず、弟子は先生なしでもやっていけることを示さなければなりません。富士子先生が「本当の学問」を目指して、行く手にモスタールト師やキュリー夫人を見たように、私も行く手に磯野富士子先生を見ながら、「真の学問の持つ可能性」を信じていきたいと思います。もっとも、富士子先生がこれを読まれたら、「あなたなんかをシャビ(弟子)にした覚えはないわよ」と、あの素敵な声で、笑われるかも知れません。

(しばやま ゆたか)